

モード Mode Mode は語る

中野 香織

女性たちの感傷、織り上げる

創造性と社会的責任に対する高い意識を備えたデザイナーを称え、育成する。そんな使命感のもと、デザイナーの中里唯馬（ゆいま）さんが創設した教育とアワードの一体型プログラム「ファッション・フロンティア・プログラム（FFP）」は、今年で3年目を迎えた。

近未来思想や新しいテクノロジー、バイオ科学を取り入れた作品が主流だったなかで、グランプリに輝いた川尻優さんの「weaving sentimentality」（感傷を織り上げる）には意表を突かれた。未来のファッションの可能性を開拓するというよりもむしろ「過去」に視線を向け、



川尻優さんの作品 (Photography by YASUNARI KIKUMA)

悲しみ、痛み、寂しさといった行き場を失った負の感情を慈しむことを表現していたからだ。

素材として使うのは、たとえば介護施設に入ることになった、知人の母のクローゼットの奥に眠っていた華やかな服。見知らぬ土地で少しでも自分の気持ちを明るくするために集められていた服で、手に入れたときの高揚感の記憶がその人の人生を支えていた。また、古民家に残された、色鮮やかな生地がパッチワークされた半纏（はんてん）。女性は誰にも見えない裏側にちくちくと手芸を施すことで冬の寒さと孤独を乗り越えていた。

古衣を再生したドレス

装うことで強くあろうとし、装うことに安らぎを求めてきた女性たちの封じられてきた思いを、衣服を通じて感じ取った川尻さんは、それらの古衣を解き、裂き、糸につむぎ、新しいドレスとしてよみがえらせたのである。多色の糸で作られたドレスの前に立つと、共感と深い癒やしの感覚に包み込まれる。

単なる物質のリサイクルではない。人間と衣服との根源的な関係の再発見、人間の感傷に対するやさしい抱擁がそこにあった。最新テクノロジーも、精緻な手仕事も、循環・再生型経済の設計も、人間らしさをとらえ直し、尊重するという大前提があってはじめて意味をもつのだということを、「最先端」に立つ人の朴訥（ぼくとつ）なファッションデザインは示唆してくれる。